

E. Christopher Ellison, Robert M. Zollinger, Jr. (原著)
安達洋祐 (訳)

ゾリンジャー外科手術アトラス 第2版

土岐祐一郎

大阪大学大学院・消化器外科学

手術は目で学ぶものなので昔から手術アトラスというのは外科医にとって最も大事な教科書である。われわれが研修医のころは「〇〇手術体系」という全40巻以上の大作があり、手術の前には図書館に行ってコピーしたものである。また、コピーのない時代なので手術所見を書くときはその中の絵を丁寧に模写し、それが手術の復習にもなっていた。

そして時代は進み最近では手術の動画が簡単にインターネットで見られるようになった。今更仰々しい手術書などいらないのではないか、この本もやや否定的な気持ちで開いてみた。500ページの中に実に150にも及ぶ手術の綺麗な線画と適切な解析が載っている。多くの術式は2ページに（最長は臍頭十二指腸切除術の18ページだがそれでも簡潔といえよう）まとまっており、動画を何分も見続けるより、ずっと容易に手術が理解できる。事典的に使うのであればインターネットよりはるかに便利だなというのが第一印象であった。

しかし読み続けているうちに手術ビデオとの決定的な違いに気が付いた。

最近の手術ビデオのほとんどは術者と視野を共有した内視鏡手術の動画である。そこでは鉗子の先端だけが拡大視されており、例えば胃癌では上腹部全体は見えていない。手術にとって最も大事な大局観、どの程度胃を取って、次にどこまで郭清して、その後空腸のどのあたりと吻合して、というのは常に術者の頭の中にのみあり、ビデオではその操作が始まり画面でアップになるまで見ている人にはわからないのである。滑らかな鉗子の動き、血の出ない切離に見とれるばかりで実は全体像は見えていないというのが手術ビデオの限界なのだ。一方、開腹術では術者は45度の全体視野と3度の中心視野を同時に認識している。いうまでもなく手術の流れを理解するには45度の全体視野のほうが大事なのだが、優れた手術書は全体視野と中心視野とをうまく混ぜて10枚程度のスケッチで全てを理解させる。特

に本書は最新の内視鏡手術を多く取り入れているが、そこでは誰も見るはずのない内視鏡手術の全体視野の絵が多く記載されている。よほど慣れた術者が想像して書くのでなければできない仕事である。内視鏡手術の時代においても、いや内視鏡手術の時代だからこそ手術書が大事なのだとあらためて認識させられた。

最後の決め手は訳者の絶妙な訳注がたくさん載っていることである。「訳注：日本の外科医は自動縫合器を使わず、きちんと根部で結紮・切離するだろう」とあるのを原書の編集者や執筆者は知っているのだろうか？と少し心配になるが、優れた外科医である安達氏のお陰で本書は日米の壁を越えた即戦力として有用性の高いものに仕上がっている。

●A4/頁 576/2018年

定価：本体 15,000 円＋税

[ISBN978-4-260-03228-5]

医学書院 刊